

Regeneration of Architectural Assets

特集 都市のストック再生

● 歴史・文化価値からストック再生を考える

三仏寺投入堂をめぐる幾人もの「誰か」

中谷 礼仁

まちなか資源としての住宅・建築ストックの再評価

宗田 好史

生活文化資源とアーバンデザインマネジメント

橋爪 紳也

三仏寺投入堂を めぐる幾人もの「誰か」

中谷 礼仁

Written by
Norihito Nakatani

はじめに

「三仏寺」は、鳥取県東伯郡三朝町の山あいに展開する精妙な構成を持つ寺院群である。修験道の行場が発端であつたらしい。その寺の敷地のいちばんの山上に位置し、切り立つ崖下に、まるで空中からはめ込まれたかのようにして建っているのが、その奥の院、投入堂である。見学者は入山許可証をもらい、険しい山道をはい上がり、ようやくそこに到達する。創建は平安時代末期とされているが定かではない。その院は建ち方の異様さをして、役行者が法力で堂を投げ入れたのだという言い伝えがあり、別名、投入堂ともいわれてきた(写真1)。

投入堂の第一の特徴は、この建物が最も初期の「懸け造り」であつたことに求められる。「懸け造り」とは、山崖や岩の上、あるいは河岸に張り出して造られた建造物であり、その床下の土台に特徴がある。一般のそれは「貫」と呼ばれる水平材を縦横に通して柱を緊結し、まるでシヤングルジムのような人工地盤を作るのである。とはいえ投入堂の「懸け造り」はそれとは異なつた。海月(クラゲ)のような浮遊感、軽さを持っていることが特徴である。まるで宇宙から飛来した建造物であるかのようなのだ。この異形の建物は、過去の事物にまつわるさまざまな価値を検討するのに適当な、いくつかの側面を持っている。

「文化的価値」は 現在の視点で決められる

投入堂が国宝に指定されたのは、明治三十七年二月のことであつた。この投入堂に文化的価値が見いだされたのは近代においてであること



【写真1】投入堂の様子

は、とても大切なことである。つまり、過去の事物をめぐる文化的価値とその事物が、当初に担っていた価値とは当然のように一致しないものだからである。明治時代初期の排仏毀釈、日本の高度経済成長時代の伝統建築の大量破壊、二〇〇一年に爆破されたアフガニスタン・バミヤン石仏の事例からも明らかのように、私たちに先行して存在している事物の価値は、時代毎の政

治体制によって肯定的にも否定的にも変わっている流動的なものである。

また、単に古いというだけでも文化財的価値は発生しないだろう。近過去のものまで含めれば、むしろ現在を構成している要素は、ほとんどが過去のものなのであるから。以上を考慮すると、過去の事物にまつわる文化財的価値とはそのものが本来内属させてきたものであることはなく、むしろ過去の事物を、われわれが今どう価値づけようとしているのかという視点においてのみ検討可能なものである。すると、ある文化財的価値の裏側には、必ず今の誰かによって貴重であること、かけがえのないことと同時に不要である(疎遠である)ことが潜んでいる。その「誰か」は、「国主」であれば「現国家」である。そして「かけがえのない」要素は、初期の「懸け造り」という建築様式や、他に類例を見ないその建ち方であり、それは「誰か」の価値を高めるものとして機能する。そして、「不要であること」とは、現在の価値に照らしてそれが文化的意義しか持ち合わせないという意味で、誰かにとって安全であるということである。普通「のよ」うにして文化財的な価値づけがされたものは、敬して遠ざけられるのが常である。移動可能な美術品の場合、美術館や博物館はその保全を目的にそれらを取得する。私たちは、美術館や博物館を「見るところ」として認知しているが、展示期間の限定、そして公開物と収蔵物の比率から考えれば、それは同時に「見せないところ」としても機能している。投入堂の場合、その隠ぺい機能は、その山上までの道行き自体が確保し



【写真2】火渡り神事の様子

ているとはいえない。

つまり文化財的価値とは、実はその全てが現在の視点からしか決めることができない。その結果として価値づけられた過去の事物は、あがめ奉られるがゆえに隔離される。そして、歴史的に価値づけられた以外の過去の事物は、逆に破壊されていく。多少いかめしく書いてしまっただけいえ、文化財的な価値づけに内在する基本的な矛盾点は以上である。それは、私たちと過去の事物の結びつきによつては、やや不自由なあり方といえるかもしれない。それらは厳密に境界分けされているからである。

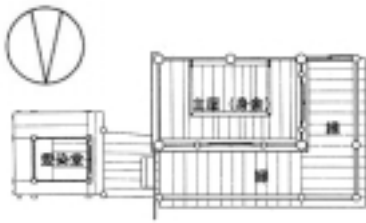
生きている建造物は

多様な価値を持つ

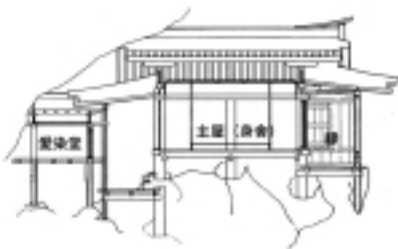
しかし過去の事物が今現在も使われているものであるとしたら話は異なる。その点、貴重だろうが何だろうが活用せざるを得ないという、建造物特有の特徴はむしろ救いである。筆者が初めて三仏寺を訪れた時は、おりしも「火渡り神事」が行われる日であった。横に並べられた丸太に火がくべられた後を、行者が渡るものである。いつころから行われているものなのか知らないが、小さな子どもまでもが願を掛けながら歩き渡るけなげな姿を見て、驚いてしまった(写真2)。それらは現在の目から見れば危険な行為ではある。しかし、文化財的価値づけを享受する誰かとは違った誰かのためにもこの寺が存在していることがこの行事の存在ゆえによくわかるのである。入山場所から投入堂まで続く行程は、ロープを伝って歩かなければいけないところなど、かなり危険な個所も存在するが、だからと言って安全な柵が造られるわけではない。安全な柵は、現在の「誰か」にすれば便利なものだろうが、修業の意味を持つ三仏寺の入山にとっては、その意味を半減させるものだからである。むしろ投入堂に続くこの道程は、思いの外、よく考え抜かれていると思うほどに、そこそこに危険で、スベクタールである。

投入堂までの途中にある近世初頭建立の「文殊堂」も興味深い建物である。大きな岩の上に作られた「懸け造り」のその建物は、その四周が

投入堂



平面図



断面図



西側面図

縁側で囲まれているため、空中縁側とでもいってよきシールドな光景を作り出している(写真3)。それは近世の頃に、三仏寺に備わった新しいデザインだったであろう。生きている建造物とその周囲とは、このようにして複数のさまざまな時代の「誰か」のために作られた光景が交響しているような魅力を持っているのである。このような過去の事物の持つ魅力は、単一の文化的価値とはまた異なつた多様な価値なのである。

投入堂の「増築か新築か問題」

この投入堂をめぐる、昭和二〇年代初頭に、一つの論争が起つたことがあった。それは投入堂が一気に建てられたもの(新築)であったのか、それとも徐々に増築されて今の形になったのか

についての論争であった。実はこの論争は、投入堂の本質的価値を考える上できわめて有益である。新築か増築かという論点は、実は、時間のプロセスにおける建造物の生き方を問おうとした奥深いものであったからである。

投入堂の平面の構成は、大きく三つで成り立っている。投入堂は北面の崖に張り付くように建っている。柱間一間×二間で構成された崖側の主屋(身舎・もやといふ)と、その北と西面に縁が付加され、絶景を得ている。そしてそれらの東には「愛染堂」という小祠が取りついているのである(図)。そしてそれぞれには異なる庇が複雑に取りつき、その組み合わせに精妙な調和を作り出している(次ページ写真4)。本来であればパラパラになってしまつたら、それら庇たちが、個別的でありながらも見事に構成されているのである。つまり投入堂は、さまざまな細部が組み合わせられてできている。一気に建てるとすれば、普

通このような複雑な構成は計画されない。主屋と縁と付属室を一つにまとめ、屋根を架け渡した方が合理的だからである。

それを証明するかのようにつ、古建築の技術に詳しい大岡実氏は、投入堂が数次の増築を経て現在の形になったことを、その細部を比較することで主張したのである。それぞれの場所の柱の材質、大きさ、面のとり方の違い、普通これらは同時期に建てられれば同じになることの方が普通である。庇の組み合わせに非合理的部分があることなど、



【写真3】文殊堂の空中縁側



【写真4】投入堂の底細部

加えていくのであった。堀口の指摘は大岡ほどの科学的根拠があるわけではないが、実物を見れば堀口の観点もよくわかる。一気に作られたと考えざるを得ないくらい、もう動かしようのない完成度を投入堂が見せているからである。なにせ「投げ入れ」た、¹⁾という言い伝えがあるくらいなのだから。通常の増築ではこのような統一的な雰囲気は決して考慮されないものである。というのも、増築自体がそのような統一性を放棄したのがゆえに発生する行為でもあるからである。私の担当する建築史の授業では、「この論争を、増築が新築か問題」として学生に筆記課題として与えている。しかしその決着はしていない。

過去の事物の持つ本質的価値

最後に、筆者なりにその問いに答えてみることにしたい。両者の考え方はどちらもその分析方法において導き出された結果としては間違っていない、と筆者には思われる。それは部分的には正なのである。であるならば、両者がともに正解となるような新しい見解を導き出せばよい。つまりこの問題は、「常に統一的な美を意識して幾回もの増築が可能であったか」を問えばいいこととなるだろう。その答えは、「きわめて困難であるが可能である」となるだろう。ごく少数であるが、日本建築にはそのような統一的な増築過程が繰り返された例が確かに存在する。

「桂離宮」はその代表格である。桂離宮は十七世紀初頭に智仁親王によって始められた八条宮家の別荘であった。それは、かるき茶屋²⁾と呼ばれた小さな茶亭から始まった。その後増築を繰り返して、古書院、中書院、楽器の間、新御殿という構成となつて完成をみた。ここでかるき茶屋は古書院に変貌し、その意味機能を変えながらも、新しい全体の中に新しい部分としての意味を再生されているのである。このようにして過去の断片は、結論づけられた³⁾岡崎乾二郎⁴⁾のであった。投入堂、そして桂離宮において、過去と現在が相互に触発されて新しい価値が創造されるプロセスが明らかになっている。決して単一の価値には汲み尽くせぬ剰余、それが実は過去の事物の持つ本質的価値なのではないかと思う。

CEL

(1) 大岡実、三徳山三仏寺の建築 特に投入堂について、『日本建築の意匠と技法』中央公論美術出版、昭和四六年に所収
 (2) 「投入堂」古美術、宝雲社、昭和三年一月、現代語訳
 改は筆者による

◆中谷 礼仁(なかにのりひと)

建築史家、大阪市立大学工学部建築学科建築デザイン専任講師。一九六五年東京生まれ。八七年早稲田大学理工学部建築学科卒業。八九年同大学院修士課程修了。八九〜九二年清水建設株式会社設計本部。九二〜九五早稲田大学院後期博士課程。著書は、『国学・明治・建築家』(蘭亭社)。『近世建築論集』(アセテート)。『清水建設二百年』(共著、清水建設)。『数寄屋の森』(共著、丸善)。『磯崎新の革命遊戯』(共著、TOTOO出版)。『建築マップ(京都)』(共著、TOTOO出版)ほか。

彼によって証明されたことは、投入堂が増築の結果できたものであったことをますます裏付けるようになっていった¹⁾。
 これに真つ向から反論を加えたのが、建築家・堀口捨巳であった。
 伝統建築にも造詣の深かった堀口はその建築家的直観において、投入堂が数次の増築によって現在のすばらしい姿になしたとは考えられないと述べたのであった。「場所の選び方といい、組み立てといい、全てにわたって世の常の考えを超えたもので、定まり型に捕らわれ、仕来りになすむ頭からは出てこない。その場その場にかがらした思い切った仕振りをしている」²⁾と述べているのである。彼は大岡の指摘を、異なったものの組み合わせを促したとする意匠上の観点から「しつこく」反論を